

第 11 回「日本語大賞」

テーマ「美しい日本語」

一般の部 優秀賞 受賞作品

「Nさんに教えられる」

愛媛県

岡本 千春

特定非営利活動法人 日本語検定委員会

Nさんに教えられる

岡本 千春(おかもと・ちはる)

「オハヨゴザイマス」

Nさんは、毎朝元気にこう挨拶し、職場にやってくる。

答える側の私達も、

「おはようございます」

と笑顔で挨拶を返す。

Nさんは、この五月から私達の介護施設で働くようになったミャンマーからの介護技能実習生である。

浅黒い肌にオレンジの口紅が一際映える。

上半身を折って挨拶するたびに、シルバーのピアスがきらりと光る。

小柄でもあるので、私のような六十も過ぎたオバサンにすれば「女の子」にしか見えないが、聞けば年齢は三十二歳というので、少なからず驚いた。

それでも白い歯を見せて笑うと、その笑顔にはまだどこかしら幼さが残る。

日本で就労することになり、現地の日本語学校で日本語を習い、私達の職場に配属されてきたのだ。

日本の社会で「仕事をする」となると、かなりの努力がいる。

けれどもNさんも「仕事」をするために、はるばるこの日本にまで来ているのだから必死である。

仕事を覚え、日本語を覚えようと頑張っている。

特に私の働く介護施設は、お年寄りのほとんどに認知症があり、しかも地方の人だから、方言も多く、習った日本語のようにはいかない。

かなり苦勞をしているようだ。

私達もNさんに、身振り手振りを駆使し、介護の仕事を教える。

今までなら

「ふじもつさん、トイレ行つていいか?」

苗字もそこそこに、助詞もなしの日本語で、車椅子使用のお年寄りのトイレ誘導などをしていた。

ところが、Nさんに「教える」となるとそういうわけにもいかない。

「藤本さん、おトイレに、行きましょつか?」

一語一語区切って、話しかける、とNさんも、

「フジモトサン、オトイレニ、イキマシヨカ」

私達の日本語を「教科書」を読むごとくにして繰り返す。数える職員の側も、まるで日本語教師にでもなったかのような気持ちになる。

気が付けば、どの職員もNさんに仕事を教えるというその必然性から、く、くを、と言った助詞までをきちんと話すようになっていた。

また日本語は主語を省くことが多く、相手の「顔だけ」を見ながらいきなり話す、ということなどあたり前であるけど、

「Nさん、井村さんにはこうして、脇を、抱えてあげます」

相手の顔と名前、指示する箇所、をしつかりと言うようになった。

また漢字は無理でもカタカナだけなら理解できるというので、お年寄りの名前やそれ以外の物にもすべてカナのルビをふつた。

お互い共に協力しあい、徐々にはあるが、いい感じで仕事が進んでいくようになった。

それでもいつも思うのは、説明をしている間も話しかけたときも、いつもNさんは相手の「目」を見て、しっかりと「目と目」を合わせて話を聞いてくる。

日本人はともすれば目と目を合わさない。

じつと見つめられると、どうしても目をそらしてしまう。それは日本人、ならばこそ奥ゆかしさと言えは言えるけれど、やはりどこか目を合わせることに照れもあり、苦手な国民性もあるだろう。

それだけに「目」をしっかり合わせてくるNさんに、ある種の戸惑いを覚える。

けれどもそこは、やはり受け入れるべきは受け入れるべき、と思つて私達も少しずつ目を合わせて話すようにしている。

しかも何か教えて、わかった？ というと必ず、

「ハイ」

と答える。

この「ハイ」がやけに新鮮に思えた。

思えば「はい」という、このたった二文字の言葉を、私はいつ言っただろうか？

思い起せば、大人になってからはあまり言っではない気がする。

自分自身も言っではないが、周囲の誰からも聞いてはいない。

大方が、

「ああはあ」

わかっているようなないような、曖昧な言葉で返している。

日本語は曖昧な言語で、曖昧言葉で済ませられる社会であるからこそ、無難に生きられる、ともいえる。

それだけに「はい」の真逆である「いいえ」は言いにくい社会でもある。

だからせめて言っでもいい「はい」ならば、大いに使っというと思うけれど、大人になってからの「はい」は中々言えずにいる。

特に仕事現場においての「はい」は「わかりました」にも通じる。それを口にすれば、しっかりと確認できたことにも繋がり、極めて仕事がスムーズに行く。

だからこそ、どの職場においても報告、連絡、相談、「報連相」を掲げているのに、それさえも、言わずもがなで相手もわかっているだろう、で済ましていることが多い。

けれども外国人であるNさんに、それは通用しない。

言わずもがなではなくて、ちゃんとわかるように、理解と確認の「はい」をNさんの口から得られるようにしないといけない、となれば職員達も自ずから「きちんとした」日本語を話すようになっていた。

気が付けば、職員の誰もがどこかしら言葉が「丁寧」になり、言葉遣いが「丁寧」になってくると、不思議なもので、職場の人間関係も和らいだものに変わっていった。

Nさんが職場に来たことで、始めは言葉も違う外国人に戸惑いを覚え、一緒に仕事をするのにさえ躊躇していた。けれども一生懸命に仕事を覚え、日本語を覚えようと必死になっている姿に、こちら側も刺激されていた。

職場に慣れるに従って、Nさんの存在は、職場を和ませてくれる新風のような存在にもなった。思えば「丁寧」に相手にわかるような言葉で「話す」「聞く」「伝える」。

これこそが「言葉」の原点であり、何より「言葉」を持つ人間だけ与えられた「特権」であるとも言える。

取り立てて難しい言葉や古くからの文献を引用したりして、言葉を着飾る必要などない。

相手があつてこそ「言葉」なのだから「きちんと話す」さらに誰にでも「わかりやすく伝える」ということさえ心がけていけば、それでいい。

そうした言葉はしっかりと「耳」に残るし「心」にも刻まれていく。

しいて言えばそれが「美しい日本語」ということに繋がるのではないかな、と最近思うようになった。

そんな「基本的」なことを「外国人」であるNさんを通して、改めて教えられた。